

〈論文〉

アイヌ語千歳方言のアスペクト-kor an、wa an を中心として

佐藤 知己

目次

1. はじめに
2. 先行研究
 2. 1. 金田一京助
 2. 2. 知里真志保
 2. 3. 田村すず子
 2. 4. 中川裕
 2. 5. 先行研究のまとめと諸問題
3. 日本語のアスペクト論における「テイル」形の問題
4. アイヌ語千歳方言における kor an と wa an
 4. 1. kor an の用法
 4. 2. wa an の用法
 4. 3. 日本語との差異と諸問題
5. 終わりに

参考文献

キーワード：アイヌ語、アスペクト、kor an、wa an

1. はじめに

筆者は既に知里幸恵『アイヌ神謡集』の本文批判的研究に関連して、特に wa an 「～ている」という形式をめぐる、アイヌ語のアスペクトの問題について触れるところがあった(佐藤 2004)。しかし、そこではアイヌ語のアスペクトの問題そのものについて詳しく述べる余裕がなく、多くの点を未解決のまま残さざるを得なかった。そこで、以下ではアイヌ語のアスペクトについて、特に、先行研究においてアスペクトを表す形式として言及されることの多い、wa an と kor an という形

式を中心として考察してみること⁽¹⁾にしたい。なお、ここで用いた資料は特に断らない限り、千歳方言話者白沢ナベ氏(1905年千歳市生、1993年没)にご教示いただいたものである。あらかじめ記して深く感謝申し上げる。

2. 先行研究

以下では、千歳方言、もしくは千歳方言と地域的に近い方言に基づいていると思われる主な記述について、kor an、wa an の説明をみることにしたい(なお、動詞の接尾辞なども含めたより広範なアイヌ語のアスペクト研究史については田村 2003 を参照)。

2. 1. 金田一京助

金田一(1931:165)は、「進行態」という項目を立てて kor an という形式について述べている。関係部分を引用する。

kor、元来は「所有す、持つ」の意の動詞である。助辞化して、人称辞をも採らず、単に持続的意味を表はし「つ、」等の義となりたるもの、ainu ek kor-an (アイヌが来りつ、あり)の kor -an は即ち「つ、(彼)あり」である、kor oka-an は「つ、我らあり」の類である。

このように、金田一(1931)の関連する問題についての記述はごく簡単なものであり、kor an については触れられているが、wa an という形式については独立した記述がないようである。

2. 2. 知里真志保

知里(1936[1974]:101)は、「進行態」という項目を設けて次のように述べている。

kor、kor-an、kor-okai

rayayaise kor-an. 泣叫つ、ある

ukoiki kor-okai. (彼等)喧嘩しつ、ある。

rayayaise kor ukoiki kor-okai. (彼等)泣き叫び乍ら喧嘩してゐる。

金田一(1931)同様、知里の記述もごく簡単なものである。また、やはり wa an という形式についてはまとまった叙述はしていない。

(1) ここではアスペクトという用語をパーフェクトを含む関連する現象を指す広い意味で用いている。また、wa an、kor an の用法を考える場合、an が後続する場合以外で接続助詞 wa、kor がどのように用いられているのかも重要となってくるであろうが、以下では an が後続する場合に主としてしぼって考察することにする。また、文脈によっては an の代わりに複数形 oka が現れることがあるが、特に必要がない限り、wa an、kor an という形で代表させることにする。なお、本稿は平成17年度科学研究費(基盤(C)、「古文書によるアイヌ語史の構築」)による成果の一部である。

次に、知里 (1942[1973 : 498-99, 503-4]) は、アイヌ語のアスペクトを表す諸形式についてその重要性を述べ、注意を促している。以下に関連部分を引用する。

態 (アスペクト) 態は語彙的にも個々の用詞の意味の上に表現されてゐる。例へば、(イ) an 「ある」とか koro 「もつてゐる」とか云ふ用詞は普通には持続的な意味の様相を表はす。また、(ロ) osma 「はまる」とか numa 「起つ」とかいふ用詞は常に瞬間的な利他的な意味の様相を表はす。用詞によつては (イ) (ロ) いづれをも表はし得る。例へば、ne (イ) 「である」(ロ) 「になる」。eraman (イ) 「知つてゐる」(ロ) 「判る」。所謂「形容詞」はすべてこの両方の意味をもつてゐる (§ 21 註)。尚上に (イ) の例として挙げたアンやコロも (ロ) の意味に用ひられることがある。

「パイカラ アン」春になつた。「ミチ アン・コロ」孫を我・持つた。

以上 (イ) (ロ) に於ては過程が時間的に表現されてゐる。然るに用詞によつては、何等時間的な観念を含まず、所謂アオリスト的に過程のみを表現するものがある。例へば、(ハ) apkas 「歩く」や kar 「造る」は単に「歩く」といふ事実「造る」といふ事実のみを表はし、継続とか完了とかの観念は含んでゐない。これに助詞が附いて始めて継続とか完了とかの意味が現はれるのである。

“apkas kor an” 「歩き つつ ある」。「カラ ヘマカ」造り終へた。

このように用詞の態は助詞 (時には副詞) によつて措辞法的に表現されることが多い。併しまた反復法や接尾辞等によつて用詞の語形の上に表現されてゐる場合も少なくない。

知里 (1942[1973] : 498-499)

(中略) 助詞+用詞から成る連語形式が態を表はすこともある。…hine an 「…てゐる」、…… ūa an 「…てゐる」。…kane an 「…ている」等は結果態(resultative aspect)を表はすと見られる。… ūa isam 「…てしまふ」、…… ūa okere 「…てしまふ」等は完了態を表はす。第二種形式名詞の kus, kusu も用詞と連語形式をなして態を表はす。例へば…kus-ki は将然態を表はす。

「アイヌ ビト・ウタラケメコッ クシ・キ」(「神話」 p. 82)、人間・どもが餓死しようとしてゐる。

…kus[u]-ne にも同様の用法がある。

「ホプニ クス・ネコ」(「民譚」 p. 92) 起き上らうとすると。

樺太に於ては…kusu kara がやはり同様の用法をもつ。

「イベ・アン クス アン・カラ コ」我 食事し ようとすると。「ワハカアン・タ クス アン・カラ イケ」水を我 汲まうとしたら。

樺太の…kusu an は北海道の…kor an と同じく継続態を表はす。

「オマン クス アン」=『オマン コロ アン』彼行き つつ ある。

47 態と時制 既に総説で述べておいた通り (§ 26) アイヌ語の用詞には時制 (テンス) が無

い。時間的な関係は態によつて表現される。用詞が単独で述語に用ひられた場合、持続態の用詞のみは「…してゐる」といふ風に現在を以て訳され得る。

「ミチ アン・コロ」私は孫をもつてゐる。「エンチウ アン・ネ」私はアイヌ人である。

持続態以外の用詞は直説法に於て単独で述語に用ひられた場合はすべて「…した」と過去を以て訳されなければならない。例へばオマンは「彼行く」ではなくて「彼行つた」である。この点に関して従来の辞書や語法書の文例の訳は大部分誤つてゐたと云へる。パチラー文典から手当り次第の例を抜いて見ると、p. 66 に ku-kik を I strike と訳してあるがこれなどもこのままでは「私打つた」と訳すほか手は無いのである。

知里 (1942[1973] : 503-504)

知里の指摘は、アイヌ語のアスペクトの重要な点を述べたもので、現在でも参照に値する示唆に富む見解であると思われる。特に、「持続的な」 an 「ある」のような動詞でさえ、場合によっては「瞬間的」な用法を持つ、と述べている点は重要である。しかしながら、「持続態の動詞」とそうでないものとを区別する言語的な基準が十分でない点、kor an、wa an のような形式の用法が十分記述されていないなど、現時点から見ると問題が全くないわけではない。また、「(持続態)以外の」動詞が単独で用いられた場合について、「時間観念がない」とか「アオリスト」的である、と述べている一方で、別な個所では「過去」の意味である、としているのは首尾一貫していない印象を受ける。

2. 3. 田村すず子

田村の wa an、kor an に関する記述は以下のようなものである。

…wa an (単) / oka (複) 「～している、してある」 : an (単)、oka (複) は、「～いる、ある」(自)。

pon katkemat ek wa an.

お嬢さんが 来 ている

nimara póka anak ta númo

半分 だけ ぐらいは このとおり 実が入っ

wa oka.

て いる

…sekor a-nuyé wa an.

…と 書い て ある

田村 (1988 : 74)

(前略) kor を使った、…kor an (単)、…kor oka (複) 「～しつつある」という表現があ

る。

…sekor, weyyaysukupka isoytak ne

…と、ひどく苦勞した 話に

upaskuma ne ku-ye oasi kor

昔語りに（私は）言いはじめて

k-an ruwe tapan na ku-mataki.

いるんですよ 妹よ

nen póka iruka hene ohonno hene

なんとか短い間でも長い間でも

turano an wa, uwenewsar ka ki,

（彼女と）一緒にいて、楽しく語り合いもし、

ukoysoytak ka ki kor oka

いろいろお話し合いもしてい

yan hani!

なさいよ！

実際にその出来事が進行しつつある場合のみならず、長い時間経過のうちにくり返される習慣的事実の場合にも用いられることも、日本語の「～ている」と同様である。次の文は、近年の習慣として言っている。

nen ne yakka sapaha kunnere kor

だれでも 頭を 黒くそめて

oka

いる

田村（1988 : 55）

上に引用した田村の kor an、wa an に関する記述は、適切な例文を用いた、簡にして要を得たものではあるが、アスペクトについての包括的な記述とは言い難く、理論的な説明としては必ずしも十分でない面があることは否定できない。

2. 4. 中川裕

中川（1981）はアイヌ語沙流方言の kor an と wa an というアスペクト的形式について、その当時までの、特に日本語アスペクト論における成果を十分取り入れ、しかも数多くの動詞について複数の話し手へ聞き取り調査した結果に基づいて論を展開しているという点で極めて興味深いものである。手法の手堅さ、問題点の把握的的確さ、解釈の妥当性の高さという点で、今後もアイヌ語研究におけるこの分野の基本的な文献になると言って良い、極めて優れたものである。その主な論点は以下のようなものである。

中川 (1981 : 132) は、知里 (1942) に倣って、アイヌ語には「単独で〈静的な状態〉を表し得る(〈状態性〉を持つ)動詞」があり、pirka「良い」、poro「大きい」、eraman「わかる、知っている」、kor「持つ、持っている」、an「ある」、ne「である」のような例をあげ、これらを「状態性動詞」と呼ぶ。また、そうでない動詞を「非状態性動詞」と呼んでいる。そして、非状態性動詞には三つのタイプがあるとする。まず、a「坐る」、ahun「家に入る」、arpa「行く」のような動詞には wa an が付く、と述べ、「これらの動詞は、V wa an という形で、A〈主体が移動した位置にあること〉または B〈主体が変化した状態にあること〉を表す。言い換えれば、〈主体の位置の移動〉を表す動詞は A、〈主体の状態の変化〉を表わす動詞は B の意味を実現することになる」と述べ、A の例として、nen ka soy ta ek wa an「誰か外に來ている」、B の例として tap ku-siyeye wa k-an「今、私の身体の具合が悪い」という例文を挙げている。また、「どちらにもとれる例」として ne hotke wa an okkaypo mos ka somo ki no「寝ているその若者は目醒めもしないで」という例文を挙げている。また、他動詞については次のように述べている。少し長くなるが引用する。

非状態性動詞中の他動詞のうち、多くのものはこのタイプ I に属するように思われる(すなわち V wa an という形が認められる)。これらの動詞は、〈主体の状態変化〉を表すものと、〈対象の状態・位置の変化〉を表すものの二つに区分できる」

この二者の違いは、V と an の取り得る人称の関係に反映される。すなわち、V wa an (V kor an も同様) においては、V だけでなく、an もまたそれ自身人称形を作る(田村, 1972, p. 150, p. 153参照)。ここで、他動詞においては、V の主格の人称が an の主格の人称と一致する場合(V=an と記す)と、V の目的語の人称と an の主格の人称が一致する場合(V≠an と記す)がある。

例として、「お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい」という文を、両氏に訳していただいたものを次に挙げる。

- (4) sake ku-hok wa k-an na en -kosinewe yan. (木村)
酒を 私が・買って私が・いるから私に・遊びに来て下さい
- (5) tonoto ku-hok wa an na en-kosinewe. (川上)
酒を私が・買ってあるから私に・遊びに來い

中川 (1981 : 132)

また、中川は、タイプ I 型に属する動詞について、「これらのタイプ I の動詞が、V kor an の形をとる場合には、V wa an で表される〈結果の状態〉に達するまでの〈変化の過程〉中にあることを表す」と述べている(中川1981 : 134)。

タイプ II については、「V wa an という形が言えないと考えられるもの」と述べて、apkas「歩く」、esna「くしゃみをする」のような例を挙げている(中川1981 : 135)。

タイプ I とタイプ II の違いについて、tere と kannunara の例をあげ、「積極的・能動的に待つ場

合には V kor an、受動的に待つ場合には V wa an の形がとられるとみるべき」とし、「kannunara の表しているのは〈動作〉としての「待つ」であるのに対し、tere は「待つ」という静的な体勢に入る〈変化〉を表すという風にも言える」と述べている（中川1981：137）。

タイプⅢについては、nukar 一例しか発見できていないと述べ、「〈注視する〉という能動的な「見る」行為そのものを nukar が表す時、kor an をとり、〈視線をそちらに向ける〉といった変化を nukar が表わして、その後の「見ている」状態、〈目を向ける〉という行為の結果の状態と見なされる時、wa an をとる」（中川1981：140）と述べている。そして、主に日本語から予想される結果と異なる事例を挙げて注意を促している。

既に述べたように、中川（1981）は極めて優れたものであり、その結論の妥当性も概ねゆるがないものと考えられるが、細かい点では議論の余地が全くないわけではない。例えば、中川は概略、nukar が能動的な「注視する」行為を表す時は kor an、そうでない場合は wa an を取るのではないかと、とする。しかし、「能動的」という規定の仕方は、誤りではないにしても、定義としては極めて曖昧であると言わなければならない。なぜなら、もし中川の記述が正しいとすると、他の多くの動詞（例えば「聞く」など）についても、能動的か否かによって、wa an, kor an が使い分けられる、という例が多数あっても良さそうなものであるのに、この種の動詞が nukar ただ一つしか報告されていないのはなぜか、また、中川の推測が正しいとすれば、「にらむ」のような、「注視」の要素を含むと考えられる動詞は専ら kor an を取ると予想されるが、事実はどうか、など、今少し追求する必要があるであろう。

2. 5. 先行研究のまとめと諸問題

以上、先行研究を簡単に概観したが、中川（1981）以外は比較的簡潔なものであり、また、中川の考察はあくまでも動詞の分類を目的としているので、ある意味で当然ではあるが、wa an, kor an の機能そのものの記述を目的としているわけではない。従って、アイヌ語のアスペクトに関する記述としては、若干の不足が感じられる。

後に、ここで述べたような問題点を含め、千歳方言のデータを元に詳しく検討するが、その前に、関連する問題が日本語に関する議論においてどのように扱われているのかを参考までに見ておくことにする。アイヌ語の wa an, kor an は両者とも「ている」と訳すことが可能な、日本語と類似した構造を持つ形式であるので、これらの形式と、日本語の「ている」形の、どこが共通していてどこが大きく異なるのか、という視点は、アイヌ語のアスペクト現象を考察する上でも大いに役立つと考えられるからである。

3. 日本語のアスペクト論における「テイル」形の問題

近年、日本語学の進展とともに、日本語のアスペクトについて活発な議論がなされている。なかでも工藤（1995）は日本語のアスペクトの機能を総合的に考察したもので、日本語アスペクト論の

主要なものの一つであると言ってよいであろう。工藤によれば、アスペクトを考慮して日本語の動詞を分類すると以下のようになる。

(A) 外的運動動詞

(A・1) 主体動作・客体変化動詞〈内的限界動詞〉〔他動詞〕

- ① 客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞
開ける (以下略)⁽²⁾
- ② 所有関係の変化をひきおこす動詞
あげる (以下略)

(A・2) 主体変化動詞〈内的限界動詞〉

- ① 主体変化・主体動作動詞〔再帰動詞〕
きる (以下略)
- ② 人の意志的な(位置・姿勢)変化動詞〔自動詞〕
あがる (以下略)
- ③ ものの無意志的な(状態・位置)変化動詞〔自動詞〕
あたたまる (以下略)

(A・3) 主体動作動詞〈非内的限界動詞〉

- ① 主体動作・客体動き動詞〔他動詞〕
うごかす (以下略)
- ② 主体動作・客体接触動詞〔他動詞〕
いじる (以下略)⁽³⁾
- ③ 人の認識活動・言語活動・表現活動動詞〔他動詞〕
かぐ (以下略)⁽⁴⁾
- ④ 人の意志的動作動詞〔自動詞〕
あそぶ (以下略)
- ⑤ 人の長期的動作動詞〔他動詞、自動詞〕
いとなむ (以下略)
- ⑥ ものの非意志的な動き(現象)動詞〔自動詞〕
うごく (以下略)

(B) 内的情態動詞〈非内的限界動詞〉

(B. 1) 思考動詞

- おもう (以下略)

(2) 工藤は多数の動詞をあげているが、ここでは一つだけあげて他は省略した。

(3) なお、後で問題とする「まつ」を工藤はここに入れている。

(4) なお、後で問題とする「みる」を工藤はここに入れている。

- (B・2) 感情動詞
あきらめる (以下略)
- (B・3) 知覚動詞
あじがする
- (B・4) 感覚動詞
いたむ (以下略)
- (C) 静態動詞
 - (C・1) 存在動詞
ある、いる (以下略)
 - (C・2) 空間的配列動詞
そびえている (以下略)
 - (C・3) 関係動詞
あたいする (以下略)
 - (C・4) 特性動詞
あますぎる (以下略)

工藤 (1995 : 73-78)

また、工藤は、動詞の分類とアスペクト形式の関連を次のように簡潔にまとめている。

	スル	シテイル
主体動作・客体変化動詞	ひとまとまり性 ＝終了限界達成性	動作継続性 (変化結果継続性)
主体変化動詞	終了限界達成性	変化結果継続性
主体動作動詞	ひとまとまり性 開始限界達成性	動作継続性

工藤 (1995 : 88)

なお、工藤は、「シテイル」形に、動作パーフェクトと状態パーフェクトの二種の用法を認めて、その違いを次のようにまとめている (以下の特徴を有する方が「状態パーフェクト」、有しない方が「動作パーフェクト」である)。

- ① 結果をもたらす先行した運動を直接とらえているか否か
- ② 運動の必然的な直接的な結果か、偶然的な間接的な結果か
- ③ 結果の継続＝顕在性を全面にだしてとらえているか否か

工藤 (1995 : 118)

結果として、工藤 (1995 : 119) は状態パーフェクトと動作パーフェクトの例として、例えば次のような例を挙げる。

彼女は結婚している。(結果継続=状態パーフェクト)⁽⁵⁾

彼女はスイスの教会で結婚している。(動作パーフェクト)

以上に引用した工藤 (1995) の所論は、アイヌ語の *kor an*、*wa an* という、日本語の「テイル」形に相当する機能を持つ形式の考察にも役立つものと考えられる。ここで、アイヌ語と関連づけて上の表を検討してみると、概略、外的運動動詞のうち、A1 (主体動作・客体変化動詞)、A2 (主体変化動詞) と意味的に対応するアイヌ語の動詞には *wa an* が付き、A3 (主体動作動詞)、B (内的情態動詞) には *kor an* が付く、と言えそうである。このことは、「変化」を含むかどうか、という点が、中川 (1981) で指摘されているように、アイヌ語においても重要な要因であることを示すものと言える。もっとも、これだけだと、日本語もアイヌ語も同じような機能の区別 (変化結果か動作継続か) を有するが、ただアイヌ語にはそれぞれに *wa an* と *kor an* という別々な形式があり、日本語には「テイル」という一つの形式しかない、と言えは済むことになる。しかしながら、日本語における考え方が、無条件にアイヌ語にも同様にあてはまるとは言えない点があることも、今更言うまでもないことである。特に動作パーフェクトに関しては問題が多い。詳細については4節で詳しく論ずることにする。

4. アイヌ語千歳方言における *kor an* と *wa an*

以上、先行研究において、主として *kor an* と *wa an* という形式がどのように扱われてきたのか、また、類似の形式を有する日本語の事情を概観したが、以下では筆者が調査した千歳方言のデータに基づいて、この問題を具体的に再考してみることにする。なお、日本語との対照を意図して、3. で紹介した工藤 (1995) の日本語動詞の分類とできるだけ平行的な形で示すことにする。

4. 1. *kor an* の用法

まず、*kor an* という形式についてみることにする。*kor an* と用いられる動詞を、意味によって便宜的に分類して示すと、以下のようになる。また、それぞれの部類に対して例文をあげておく。

(A) 外的運動動詞

(A・1) 主体動作・客体変化動詞〈内的限界動詞〉〔他動詞〕

(5) 工藤はこの個所では「状態パーフェクト」という用語を用いていないが、別の個所 (工藤 1995 : 117) で「結果継続=状態パーフェクト」と規定しているので、ここでは情報を補ってある。

① 客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞

kar 「作る」、kaypa 「(何度も) 折る」、pirasa 「広げる」

- (1) cipoyep ku-kar kor k-an ruwe ne wa. ⁽⁶⁾

チポイエップ 1 SG-作る つつ 1 SG-いる の だよ

「私はチポイエップを作っていたのだよ。」

- (2) (砂利) ru or un pirasa kor an.

道 中 へ 広げる つつ ある

「(砂利を) 道へ広げていた。」

(A・2) 主体変化動詞〈内的限界動詞〉

③ ものの無意志的な(状態・位置)変化動詞〔自動詞〕

poro 「大きくなる」、retar 「白くなる」、sat 「乾く」、sikannatki 「丸くなる」、sirpeker 「明るくなる」

- (3) pet poro kor an.

川 大きくなる つつ ある

「川が増水しつつある」

(A・3) 主体動作動詞〈非内的限界動詞〉

① 主体動作・客体動き動詞〔他動詞〕

suyesuye 「揺らす」

- (4) kusta hunna tek suyesuye kor an.

対岸で 誰か 手 振る て いる

「対岸で誰かが手を振っている」

② 主体動作・客体接触動詞〔他動詞〕

eyapkir 「投げる」、eywanke 「使う」、hunara 「探す」、omap 「かわいがる」、ukokikkik 「みんなでなぐる」

(6) 以下、以下のような略号を用いる。1 SG (一人称単数)、2 SG (二人称単数)、2 PL (二人称複数)、INDEF (不定人称)、PCL (助詞)。

(5) hekaci pet ot ta suma eyapkir kor an.

男の子 川 中 に 石 投げる て いる

「男の子が川に石を投じている」

③ 人の認識活動・言語活動・表現活動動詞〔自動詞、他動詞〕

自動詞:

hawean 「言う」、itak 「話す」、nuwap 「うなる」、okwose 「遠吠えする」、rek 「(動物が) 鳴く」、sakayokar 「怒り騒ぐ」、sinotcaki 「歌う」、sunke 「嘘をつく」

(6) yaki yaki sekor yaki hawean kor an.

ヤキヤキ と セミ 鳴く て いる

「ヤキヤキとセミが鳴いている」

他動詞:

ciskar 「～のことを泣く」、eranak 「心配する」、hunara 「探す」、nu 「聞く」、nukar 「みる」、senpirke oytak 「陰口を言う」⁽⁷⁾、siren 「誘う」、ye 「言う」

(7) rajio ku-nu kor k-an wa.

ラジオ 1 SG-聞く て 1 SG-いる よ

「ラジオを私は聞いているよ」

(8) ene eci-yaynupa kor oka hi

こう 2 PL-思う て いる こと

a-nukar kor an-an.

INDEF-見る て いる-INDEF

「お前達はどう思っているかを人が見ている」

④ 人の意志的動作動詞〔自動詞、他動詞〕⁽⁸⁾

arpa 「行く」、cepkar 「魚の腸を取る」、ehoripi 「～で地団駄を踏む」、ek 「来る」、esinot 「～で遊ぶ」、horarayse 「後退しつつ下りる」、ihuraye 「洗い物をする」、kari 「回る」、mina 「笑う」、omanan 「歩き回る」、raporapo 「はばたく」、rayayayse 「泣きわめく」、tumikor 「戦う」

(9) toop rik ta cikap kari kor an.

ずっと 上 で 鳥 旋回する て いる

「ずっと上で鳥が旋回している」

(7) これは句であるけれども意味的には語彙化の程度が高いものであるのここに挙げた。

(8) raporapo 「はばたく」などは人の動作ではないが、仮にここに入れた。

⑤ 人の長期的動作動詞〔他動詞、自動詞〕

適切な例なし。⁽⁹⁾

⑥ ものの非意志的な動き（現象）動詞〔自動詞〕

as「（雨、雪が）降る」、cik「（雫が）垂れる」、oykus「水漏れする」、purpurke「湧く」、ratki「（水が）ちよろちよろ流れる」、san「（川が）下る」、uhuy「燃える」、uruyruk「震える」⁽¹⁰⁾

(10) poro pet san kor an ruwe ne.

大きい 川 下る て いる の だ

「大きい川が流れているのだ」

(B) 内的情態動詞〈非内的限界動詞〉

(B・1) 思考動詞

eramuan「わかる」、ramu「思う」、yaykouwepeker「考える」、yaynu「思う」

(11) k-eramuan kor k-an.

1 SG-わかる て 1 SG-いる

「私がわかりつつある」

(12) ukuran mano anakne, k-omke ka somoki

昨夜 から は 1 SG-咳する PCL ない

k-esna ka somoki kusu, pirka kuni

1 SG-くしゃみする PCL ない ので 良くなる と

ku-ramu kor k-an ma.

1 SG-思う て 1 SG-いる よ

「昨日からは私は咳をせず、くしゃみをしないので良くなるだろうと思うよ。」

(B・2) 感情動詞⁽¹¹⁾

iruska「腹を立てる」、eramuriten「喜ぶ」

(9) 「いとなむ」に当たるような適切なアイヌ語動詞を考えることが困難なので、「適切な例なし」とした。

(10) uruyruk「震える」は「ものの動き」ではないが、仮にここに入れた。

(11) この部類に属する日本語の動詞に対応する動詞をアイヌ語に見いだすことはしばしば困難である。かろうじて二例を挙げたが、他に適切な例がもっとないかどうか研究の必要がある。

(13) kamuy ka eramuriten kor okay nankor.

神 も 喜ぶ て いる だろう

「神も喜んでいるだろう」

(B・3) 知覚動詞

適切な例なし。⁽¹²⁾

(B・4) 感覚動詞

iperusuy 「はらがへる」⁽¹³⁾

(14) iperusuy kor oka kur

腹が減る て いる 人

「腹が減っている人」

(C) 静態動詞⁽¹⁴⁾

(C・1) 存在動詞

該当する適切な例なし。⁽¹⁵⁾

(C・2) 空間的配列動詞

該当する適切な例なし。⁽¹⁶⁾

(C・3) 関係動詞

該当する適切な例なし。⁽¹⁷⁾

(C・4) 特性動詞

該当する適切な例なし。⁽¹⁸⁾

(12) この部類に属する日本語の動詞に対応する動詞をアイヌ語に見いだすことはしばしば困難である。また、対応すると思われる表現がある場合(hum as 「おとがする」、hura at 「におう」)でも、これまでのところ kor an, wa an が付いた例を見いだすことができないので、とりあえず「適切な例なし」とした。

(13) 「いたむ、つかれる、しびれる」にあたる arka, sinki, tukunne についてはこれまでのところ kor an, wa an のいずれも共起した例がない。iperusuy 「はらがへる」が代表的な例であるという保証はないので今後なおも検討が必要である。

(14) 工藤(1995:77)の静態動詞の提示の仕方には問題がある。「ある、いる」、「そびえている」を共に「静態動詞」とするが、「ある、いる」は「ている形」にならない動詞、「そびえている」は「ている形」しかとらない動詞であって、性質が正反対であるが、この点については何も説明がない。ここではひとまず工藤に従うが、今後、検討の余地がある。

(15) 存在動詞 an に kor an の付いた例はいまのところない。

(16) この部類に属する日本語の動詞は「そびえている」のようなものであるが、対応する適切なアイヌ語の動詞を見いだすことが困難である。

(17) この部類に属する日本語の動詞は「あたいする」のようなものであるが、対応する適切なアイヌ語の動詞を見いだすことが困難である。

(18) この部類に属する日本語の動詞は「あますぎる」のようなものであるが、kor an と共起する対応する適切なアイヌ語の動詞を見いだすことが困難である。

上の結果は、概略次のようにまとめることができる。すなわち、kor an が共起できる動詞は、基本的には(A・3)「主体動作動詞」、(B)「内的情態動詞」のような終了限界を持たない「非内的限界動詞」であり、このような動詞と用いられた時、kor an は「進行中の過程、継続」を表している。また、(A・1)「主体動作・客体変化動詞」、(A・2)「主体変化動詞」と kor an が共起した場合でも、やはり終了限界へと向かう過程にある「継続」を表している、ということができる。この結果は概ね中川(1981)で沙流方言に関して指摘されている kor an の用法と一致すると言って良い。なお、細部の問題点については後述(4. 3.)する。

4. 2. wa an の用法

千歳方言において、wa an という形式と共起できる動詞を、やはり日本語との対照を念頭に置いて、3節に挙げた工藤(1995)の日本語の動詞分類にできるだけ忠実に従った形で整理すると、以下のようなになる。

(A) 外的運動動詞

(A・1) 主体動作・客体変化動詞〈内的限界動詞〉〔他動詞〕

① 客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞

anu「置く」、asi「立てる」、atte「掛ける」、kaye「折る」、kekke「折る」、kosina「～に結ぶ」、nuye「彫る」、osura「捨てる」、rayke「殺す」、satke「干す」sirkote「繋ぐ」、ukao「しまう」

(15) inaw k-asi wa an ruwe ne.

御幣 1 SG-立てる て いる の だ

「御幣を私はたててあるのだ」

(16) noya a-kar wa a-satke wa oka kor

ヨモギ INDEF-取る て INDEF-干す て ある と

「私がヨモギを取って干してあると」

(17) k-ukao wa an pe ne korka tanto

1 SG-しまう て いる もの である けれど 今日

ani oca ku-ku siri ne wa.

で お茶 1 SG-飲む 有様 だよ

「私がしまってあったものだけれど今日はそれでお茶を飲むところだよ」

② 所有関係の変化をひきおこす動詞

kore 「あげる」

- (18) pirka katkemat a-kore wa okay pe ne kusu
良い 奥さん 1 SG-与える て いる もの だ から
「良い奥さんを私はやってあるものだから」

(A・2) 主体変化動詞〈内的限界動詞〉

① 主体変化・主体動作動詞〔再帰動詞〕

mi 「着る」、kisma 「つかむ」、kor 「持つ」

- (19) e-kor wa e-an pe sir ka ta anu⁽¹⁹⁾
2 SG-持つ て 2 SG-いる もの 地面 上 に 置く
「お前が持っているものを地面に置け」

- (20) (koppu) ku-kisma wa k-an.
コップ 1 SG-つかむ て 1 SG-いる
「私はコップを持っている」

② 人の意志的な(位置・姿勢)変化動詞〔自動詞、他動詞〕⁽²⁰⁾

自動詞:

a 「座る」、as 「立つ」、ek 「来る」、hemesu 「上る」、heracici 「頭を下げる」、hetuku 「顔を出す」、nuynak 「隠れる」、rew 「(鳥が枝に)とまる」、rikin 「上る」、san 「下がる」、sirkaoma 「倒れる」、yan 「上陸する」

- (21) sir ka ta k-a wa k-an yakka pirka wa
地面 上 に 1 SG-座る て 1 SG いる ても 良い よ
「私は地面に座っていてもいいよ」

他動詞:

eokok 「ひっかかる」、eus 「(わなに)かかる」、koyantone 「～に泊まる」、o 「入る」、orer 「～に沈む」、osma 「勢いよく入る」、us 「～にくつつく」

(19) この例は kor 「持つ」の目的語が、wa e-an をいわば飛び越えて関係節化されている興味深い例である。

(20) 工藤(1995:74)では自動詞だけを扱っているが、アイヌ語の場合、主体の位置の変化を含み、かつ場所を目的語としてとる他動詞(eokok 「～が～にひっかかる」など)が存在するので、「他動詞」を追加してある。

- (22) (ya) eokok wa an cep
 網 ひっかかる て いる 魚
 「網にひっかかっている魚」

- ③ ものの無意志的な(状態・位置)変化動詞〔自動詞、コピュラ〕⁽²¹⁾

自動詞:

at「掛かる」、cakke「開く」、hacir「落ちる」、hokus「倒れる」、iwanke「元気になる」⁽²²⁾、
 mo「静かになる」、mokor「眠る」、mos「目ざめる」、ohasirne「留守にする」、omkekar「風
 邪をひく」、piro「傷つく」、racitke「垂れ下がる」、ray「死ぬ」、rupus「凍る」、setursesekka
 「背中を暖める」、sik「一杯になる」、siknu「生きる、助かる」、sini「休む」、sirkot「(船
 が)つながれる」、situri「伸びる」、tasutuy「息絶える」、teyne「濡れる」、tonnatara「キラ
 キラ光る」、totek「(患部が)良くなる」、tumasnu「壮健になる」、ukopene「ベトベトにな
 る」、ukotuk「互にくっつきあう」、yaskeyaske「ぼろぼろに破れる」

- (23) apa cakke wa an
 戸口 開く て いる
 「戸口が開いている」

- (24) eci-omkekar wa eci-okay na.
 2 PL-風邪引くて 2 PL-いる ぞ

コピュラ:

ne「～になる、～である」

- (25) yayeranpe huci ku-ne wa k-an ruwe ne wa.
 無知だ 老婆 1 SG-だ て 1 SG-いる の だよ
 「私は無知な老婆であるのだよ」

(21) 工藤(1995:75)では「死ぬ」をこの項に入れている。「もの」が「死ぬ」のはおかしいのであるが、ひとま
 ず工藤に従って人に関わる状態変化動詞もこの項目に入れておく。また、工藤はこの項では自動詞だけを扱って
 いるが、便宜的にコピュラ ne「～になる」もここに入れてある。千歳方言には nispa a-ne kor an-an「私は次第
 に金持ちになった」という例文がある。

(22) このグループの iwanke「元気になる」、mo「静かになる」、siknu「生きる」、tonnatara「キラキラ光る」などは、
 一応ここに所属させたものの、変化の時点が比較的明確な ray「死ぬ」のような動詞に比べると、状態変化とい
 う説明には必ずしもなじまない点があると言える。すなわち、当初から「元気であっ」たわけであり、「静かで」
 あり、「生き」ていたわけであり、「光を反射して」いたのであって、ある時点でそういう状態への変化が起こっ
 た、というわけではない。むしろ、「性質の持続」とでも呼んだほうが良いような事態を表している。他方、「結
 果」とは言えないが、主語の「存在」を必然的に含意する、という点は重要であると思われる(4節参照)。

(A・3) 主体動作動詞

① 主体動作・客体動き動詞

適切な例なし⁽²³⁾。

② 主体動詞・客体接触動詞

tere⁽²⁴⁾

(26) eci-tere wa k-an kus ne na.

1 SG/ 2 SG-待つて 1 SG-いる つもりだよ

「私はお前を待っているつもりだよ」

③ 人の認識活動・言語活動・表現活動動詞〔自動詞、他動詞〕

nu 「聞く」、nukar 「見る」、sikerayke 「にらむ」

(27) tanto eci-arki kus ne sekor an pe kamuy or wa

今日 2 PL-来る つもりだと あるもの 神 中から

ukuran wano ku-nu wa k-an ruwe ne wa.

昨晚 から 1 SG-聞くて 1 SG-いる の だよ

「今日お前達が来るつもりだということを神から昨晚私は聞いていたのだよ」

(28) ku-kar pe ku-siketok ta poronno an ma

1 SG-する もの 1 SG-目の前に たくさん あるて

ku-nukar wa k-an pekor

1 SG-見る て 1 SG-いる かのよう

ku-yaynu kor oro wa ku-hopuni wa ku-kar.

1 SG-思う つつ それ から 1 SG-起きる て 1 SG-やる

「私がやる事が目の前にたくさんあって、あたかも見ているかのように思って、それから起きて、私はやった」

(23) この部類に属する日本語の動詞には「うごかす」、「ゆらす」のようなものがあるが、アイヌ語で意味的に対応する適切な例を見いだすことは比較的困難であった。これがどういう理由によるものなのか、今後検討する必要があるかもしれない。それはともかく、このタイプの動詞で、後に kor an か wa an を取っているような例を探すことはさらに困難であった。今のところ確実な例としては suyesyue 「なんどもふる」しか見いだされていない。しかしながら、これは wa an ではなく、kor an を取るのでここでは「適切な例なし」としてある。

(24) この部類に属する日本語には「なぐる」などがあるが、この種の動詞に対応するアイヌ語の動詞で wa an を伴う例は極めて少ない。今のところ、tere 「待つ」が唯一の例である。従って、tere をここに分類すべきかどうか、逆に問題となろう。

- (29) (hekattar) a-sikerayke wa an-an akus
 子供達 INDEF-にらむ て いる-INDEF と
 「子供達を私が睨んでいると」

④ 人の意志的動作動詞〔自動詞〕
 適切な例なし⁽²⁵⁾。

⑤ 人の長期的動作動詞
 適切な例なし⁽²⁶⁾。

⑥ ものの非意志的動き（現象動詞）
 適切な例なし⁽²⁷⁾。

(B) 内的情態動詞〈非内的限界動詞〉

(B・1) 思考動詞⁽²⁸⁾
 eramuan 「わかる」

- (30) tan orouspe anakne sonno sino an orouspe
 この 話 は 本当 ある 話
 ne wa k-eramuan ma k-an ma.
 だ て 1 SG-わかる て 1 SG-いる よ
 「この話は本当の話であって、私は（それが）わかっているんだよ」

(B・2) 感情動詞 適切な例なし⁽²⁹⁾。

(B・3) 知覚動詞 適切な例なし⁽³⁰⁾。

(25) この部類に属する日本語の動詞は「あそぶ」のようなものであるが、この種の動詞に *wa an* の付く例は見いだされていない。

(26) この部類に属する日本語の動詞は「いとなむ」のようなものであるが、語彙的に対応する適切なアイヌ語を見いだすことが困難であるので「適切な例なし」とした。

(27) この部類に属する日本語の動詞は「うごく」のようなものであるが、この種の動詞に *wa an* の付く例は見いだされていない。

(28) この部類に属すると思われる動詞で *wa an* を取るものはいまのところこの例のみ。あるいは eramuan は別の部類（強いて言えば A・2 「主体変化・主体動作動詞」か）に属するとみるべきかもしれない。

(29) この部類に属する動詞は意味的に対応するものを見いだすことが難しく、また、*wa an* を取るものがいまのところ見いだされていないので「適切な例なし」とした。

(30) この部類に属する日本語の動詞は「おとがする」、「におう」のようなものであるが、これに相当するアイヌ語の *humi as*, *hura at* には *wa an*, *kor an* の付いた例がいまのところ見いだされていない。もっとも、たまたま例がないだけで、いずれかが可能である可能性もある。今後の課題としたい。

(B・4) 感覚動詞 適切な例なし⁽³¹⁾。

(C) 静態動詞

(C・1) 存在動詞

an/okay 「ある、いる」⁽³²⁾

(31) toan cikuni kotcake ta seta an ma an⁽³³⁾
あの木 前 に犬 いる ている
「あの木の前に犬がずっといる」

(C・2) 空間的配置動詞 適切な例なし⁽³⁴⁾。

(C・3) 関係動詞 適切な例なし⁽³⁵⁾。

(C・4) 特性動詞⁽³⁶⁾

ci kasu 「熟しすぎる」⁽³⁷⁾

(32) ci kasu wa okay
熟す 過ぎる ている
「熟れ過ぎている」

上の結果を簡単にまとめると、wa an が共起する動詞は、日本語の(A・1)「主体動詞・客体変化動詞」、(A・2)「主体変化動詞」が大部分であり、(A・3)の「主体動作動詞」、(B)「内的情態動詞」、(C)「静態動詞」には、そもそも日本語の動詞と対応させることが難しい場合が多い、という事情はあるにしても、wa an と共起する例は少ないようである。これは、kor an が基本的には(A・3)、(B)と共起するのと明白な対照をなしている。この点も、中川(1981)において

(31) この部類に属する動詞は意味的に対応するものを見いだすことが難しく、また、wa an を取るものがいまのところ見いだされていないので「適切な例なし」とした。

(32) いまのところ、okay については例がない。また、存在動詞がなぜ wa an を取ることができるのかは問題である。知里(1942)が指摘しているように an にも「出現」のような変化を意味する用法が可能であり、wa an はその結果の存続、と解釈することもできるが、なお一考を要する。

(33) この例は an が必ずしも「静態動詞」ではない可能性を示している。詳細は今後の検討課題であるが、恐らく、犬の出現から発話時までには時間が経過していることを明示した表現と見られる。

(34) この部類に属する日本語の動詞「そびえている」などに対応する動詞をアイヌ語に簡単に対応させることが困難であったので適切な例なし、とした。

(35) この部類に属する日本語の動詞「あたいる」、「あたる」などに相当するアイヌ語を見いだすことが困難であるので「適切な例なし」とした。

(36) この部類に属すると思われる easkay 「できる」には wa an、kor an を取る例が見いだされていないのでここにはあげていない。

(37) ci kasu は一語かどうか不明確な点があるが、工藤の分類に意味的に近いものとしてここに挙げた。アイヌ語の場合は、「熟す」という変化を表す動詞なので、結果存続の wa an が後続できるのであろう。

沙流方言について指摘されていることと基本的には一致していると言える。なお、例外的な事例とみなされる (A・3)「主体動作動詞」に属しながら wa an を伴うことのできる nukar「見る」などについては次節で扱う。

なお、wa an に関しては、中川 (1981: 133) も触れているが⁽³⁸⁾、「主体の状態の変化」を表すか、「対象の状態・位置の変化」を表すかによって動詞の取る人称に違いが出るという点も問題である。既に筆者は V wa an (ただし V は他動詞) という形式において、V と an の人称が一致して、主体の変化を表すような事例は、主に行為の結果として対象を「所持」する場合と、行為の結果として主体が「存在」する場合の二つである、という見通しを述べたが (佐藤2004: 22-23)、その後のデータの検討によってもこの傾向は裏付けられている⁽³⁹⁾。

4. 3. 日本語との差異と諸問題

さて、これまで千歳方言を資料として kor an, wa an の用法を見てきたわけであるが、主要な点は沙流方言などで先行研究によって明かとなっている事実と同様であることがわかった。しかしながら、それだけにはとどまらない点があることを以下に指摘したい。

まず注意されるのは、ともに日本語の「ている」に相当する、アイヌ語の kor an, wa an の用法を概観した結果、(A・3)「主体動作動詞」、(B)「内的情態動詞」には kor an が用いられるが、wa an は全くと言ってよいほど用いられないのに対し、wa an が用いられる動詞 (A・1)「主体動作・客体変化動詞」、(A・2)「主体変化動詞」には kor an が用いられる例があることである。特に、「主体動作動詞」と「内的情態動詞」が wa an と共起しにくい、という事実は、これまで明白には指摘されていないアイヌ語のアスペクトに関する興味深い性質を示すものと考えられる。日本語学におけるアスペクト研究の知見を援用すれば、この点における日本語とアイヌ語の差異は顕著なものであると言わなければならない。すなわち、日本語の場合は、(A・3)、(B) のタイプの動詞に「ている」が付いた場合、通常は「動作継続」を表すのであるが、「これまでに～している」という「動作パーフェクト」(「彼女はスイスの教会で結婚している」参照) の意味も可能である。これに対して、アイヌ語の wa an は中川 (1981) をはじめとする先行研究において「結果継続」を表すことがわかっており、したがって一種の「パーフェクト」を表す形式ではあるのだが、それは日本語の「ている」とは違い、「動作パーフェクト」を表示できない、ということなのである。つまり、アイヌ語の wa an はパーフェクトを表す形式と言えるわけだが、その機能は日本語と比べるとかなり限定的で、「直接的な結果」のみを示し、動作パーフェクトにおけるような「間

(38) 中川 (1981) が挙げている wa an が主語の状態を表すタイプの他動詞の例は佐藤 (2004) に挙げられているものとよく一致している。すなわち、mi「着る」、kor「持つ」、tere「待つ」などである。しかしながら、中川はこれらの動詞がもっている意味的特徴 (所持、存在) については特に言及していない。

(39) さらに言えば、「所持」も最終的には「存在」に還元できる可能性がある。「所持」は「主語が対象と共に存在する状態になる」のように意味的に分析できる可能性があるからである。従って、アイヌ語で wa an を取って主語の結果状態を表すタイプの他動詞は、「存在」という意義特徴を有するものに限られる、という単純な規則に還元できるかもしれない。

接的な結果」は示すことができないのである。このことは、アイヌ語の *wa an* という形式を考える上で見逃してはならない事実であると考えられる。ちなみに、アイヌ語には動作パーフェクトを表示する機能のある形式が別にある、ということもこの問題を考える上で参考になる。例えば以下のようない例がある。

(32) *okkaypo onuman ipe ki wa ek a ruwe?*

若者 夕食 する て 来る た の

「あんちゃん、晩ご飯食べて来たの」

tane ku-ype a wa.

今 1 SG-食べる た よ

「もう私は食べたよ」

(33) *ku-nukar pekor ku-yaynu a wa.*

1 SG-見る ように 1 SG-思う た よ

「私は(確かに)見たように思ったよ。」(今、現に、そう思っている)

これらの例文における助動詞 *a* は通常は明白な結果を含意しない (A・3) 「主体動作動詞」に属すると思われる *ipe* (*ku-* の後で *ype* に交替) 「食事する」、(B) 「内的情態動詞」に属すると思われる *yaynu* 「思う」の後に現れて、明らかに「動作パーフェクト」を表している。*a* の機能についてはまた別に詳細な検討が必要であろうが⁽⁴⁰⁾、一見したところ日本語の「た」⁽⁴¹⁾と「ている」と平行的とみられがちなアイヌ語の *a* と *wa an* という形式が、「動作パーフェクト」の表示、という観点からは日本語とは全く異なる、ある意味で逆の性質を示している (*wa an* が動作パーフェクトを表示できないのに対し、*a* はできる)、という点は重要であると思われる。

kor an と *wa an* の問題において、もう一つ重要なのは、既に中川 (1981) も指摘しているように、通例は動詞によって使い分けられていると言ってよいような状態の中で、一部の動詞が *kor an*、*wa an* 両方の形を許す場合がある、という点である (例文 8、28参照)。特に中川が指摘した「見る」を意味する *nukar* に *kor an* と *wa an* のどちらの用例もある、という事実をどう説明すべきか、という問題は、中川が一応の解決を示しているものの、細部では全く問題がないわけではないと考える。

(40) *a* は明白に過去に属する事実に対しても用いられる。例: *k-onaha tapkar siri ku-nukar a wa* 「父が踏舞するのを私は見たよ。」他方、文法的な観点から言えば、*a* は平叙文を終止することがなく、接続助詞、名詞句、あるいは終助詞 *wa* が後続するのが一般的である。このことは、*a* を含む構造が文の階層構造から言って中間段階に属することを示すものと考えられる。また、平叙文の末尾では発話者の態度を示す終助詞をほぼ必須の要素として要求する点より見て、*a* は「過去」を含意しつつも、それに加えて発話時点 (もしくは基準時) との密接な関係を示す機能を持つ形式であると推測される。

(41) 日本語の「た」の動作パーフェクトとしての用法は工藤 (1995: 142) に「もう聞いた?」とあるのを参照のこと。

中川は、nukar「見る」が例外的に kor an, wa an の両方を取ることでできる動詞であることを指摘し、kor an が使われる場合は「能動的」、wa an が使われる場合はそうでない意味で用いられた場合、という解釈を示している。しかし、既に述べたように、この説明にはこのままでは不十分な点がある。すなわち、もし「能動的」な、意識的に注意して「見る」意味を含むタイプの動詞が一樣に kor an を取るのならば、中川の予測が正しいことになるのであるが、事実はそのようではない。sikerayke「にらむ」、sikkasma「見守る」、epunkine「見張る」はいずれも wa an を取る例しか見いだされておらず（例えば sikerayke の例は例文29参照）、kor an とゆれを示すこともない。このことは、中川の説明が改善を要するものであることを示している。

まず第一に、これまで示して来たように、千歳方言の kor an, wa an に関する限り、kor an は未完了（動作継続）、wa an は結果の継続⁽⁴²⁾と概略規定できるような特徴しか見いだされない。従って、nukar だけに「能動性」のような特別な解釈を与えなければならない根拠は薄いと言える。つまり、nukar kor an と nukar wa an にもそれぞれ「動作継続」、「結果継続」の解釈を仮定するのがより妥当であると思われる。すなわち、kor an を用いた場合は、まだ終了していない、その時点で推移の途上にある、継続的な状況を「見ている」意を表していると考えられる（例文8）。これに要する動作も点的ではなく、線的にとらえられているわけである。これに対して、wa an を用いた場合は、結果の継続ではあるが、ただし、中川が言うような「視線を向ける」という動作の完了、という解釈は一考を要する。すなわち、「事態の推移」を含まない、ある光景の知覚はある時点で完了してしまう「変化」であり、その結果として主体にはその光景の「認識」が結果として残るから、wa an が用いられる（例文28）、と考えたほうがより妥当であろう。「見る」を、知覚、という意味範疇に属する典型的な動詞の一つと考えるならば、「主体の位置の変化」を連想させる「見る体勢への動作の完了」のような解釈よりは知覚を主眼に置いた解釈を取るほうがより一般性のある解釈であろう。このことは、nu「聞く」という同じく知覚型の動詞が、千歳方言においてはやはり kor an と wa an の両方を取る例があり、kor an の場合はラジオを聞く場合のような、知覚の過程にある状態を表す例（例文7）であり、wa an の場合は、話の内容をすべて聞き終わって、今は事情を知っている、という、知覚が完了してしまった後の状態を主として問題とした例（例文27）である、という事例によっても支持されるものと考えられる。中川の言う「能動性」は「継続」から副次的に文脈に応じて派生したものであり、kor an の本質的性格をなすものではないと言える。いわんや、kor an と対立する wa an に無意図性を設定する根拠はさらに薄いと言わなければならない。同様なことは eramuan「わかる」（例文11、30）についても当てはまる。なお、これら知覚を意味する他動詞が、4.2. で触れたように、V wa an という形式から見た場合、V と an の人称が一致する kor「持つ」と同じタイプに属しているのは、知覚という行為が結果的にある認識を所持する、という kor「持つ」と共通した意義特徴を有すると考えることによって説明で

(42) 日本語で動作の継続の例とされている場合にアイヌ語では wa an の付いた形式が対応していることがある。例：tere wa an「待っている」。このような事例は、逆に日本語の事例を考える上で新たな手がかりとなる可能性がある。

きると思われる⁽⁴³⁾。

5. 終わりに

本稿では、アイヌ語のアスペクトにおいて重要な形式である *kor an*、*wa an* という形式について、千歳方言のデータに基づいて、その用法の特徴付けを試みた。多くの点では、すぐれた先行研究である中川 (1981) の結果の正しさを補強するような結果しか得ることができず、細かな問題点の指摘にとどまった感がある。特に、「状態動詞」の取り扱いや、*kor an*、*wa an* を取らない動詞単体の場合の考察が十分でないことは大きな欠点であるが、今後の検討課題としたい。また、まだまだ用例も少なく、本稿で述べた仮説が正しいかどうかは、さらなる検証が必要である。しかしながら、主に日本語との対照によって、この問題の解釈において重要な観点を新たに指摘することができたと考える。

参考文献

- 知里真志保. 1936 [1974]. 『アイヌ語法概説』. (『知里真志保著作集』 4, 東京: 平凡社).
- 知里真志保. 1942 [1973]. 「アイヌ語法研究」. (『知里真志保著作集』 3, 東京: 平凡社).
- 金田一京助. 1931. 「アイヌユーカラ語法摘要」. 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』 2. 東京. 東洋文庫. 2-233.
- 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト』. 東京: ひつじ書房.
- 中川裕. 1981. 「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」. 『言語学演習' 81』. 東京: 東京大学文学部言語学研究室. 131-141.
- 佐藤知己. 2004. 「知里幸恵『アイヌ神謡集』の難読箇所と特異な言語事例をめぐって」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 10. 札幌: 北海道立アイヌ民族文化研究センター. 1-32.
- 田村雅史. 2003. 「アイヌ語におけるアスペクトに関する従来の記述の概観」. 『itahcara (イタハチャラ)』 1. 札幌: 『itahcara』創刊号編集事務局. 17-24.
- 田村すず子. 1988. 「アイヌ語」. 亀井他 (編). 『言語学大辞典』 1. 東京: 三省堂. 6-94.

(43) ちなみに、「注視」タイプの動詞が *wa an* を取ることは、これらの動詞がある場所における「存在」(「滞在」、すなわちある一定期間の存在) を通常含意するからだと考えれば説明できるように思われる。あるいは *nukar* が *wa an* を取る場合も、これに準じて考えることが可能かもしれない。また、*tere* 「待つ」、*eyoko* 「待ち伏せる」も、同じく「存在」という概念によって説明できるであろう。

Aspect in Ainu—A Note on *kor an* and *wa an* in the Chitose Dialect of Ainu

Tomomi SATO

Summary :

It is known that a number of Ainu dialects have two forms indicating aspectual differences: *kor an* and *wa an*. *Kor an* has usually been described as indicating progressive and *wa an* as perfect. However, examination of the data from the Chitose dialect of Ainu indicates that *wa an* is limited to “stative perfect” implying direct effects and that it cannot be used for “actional perfect” implying indirect effects, unlike the similar Japanese construction *te iru*. Furthermore, it should be noted that the properties of the direct effects indicated by *wa an* are also limited: it is used almost exclusively with verbs of possession or existence. Some verbs of perception, for example, *nukar* ‘to see’ and *nu* ‘to hear’, however, permit fluctuation: they can occur with both *kor an* and *wa an*, but this fact is explained by assuming that such verbs can be considered as including the same semantic component as verbs of possession, the meanings of which can be viewed as either the process of a change or the resultative state of the change (i.e. the acquisition of the perception), according to the context.

Key Words :

Ainu, Aspect, *kor an*, *wa an*